

# Museum News



絵：柳田 基

## 2026 展覧会

### 企画展

スポーツの思い出・胃袋の思い出

—体育会と食堂が彩る関学のキャンパスライフ—

2026.5.18(月)▶7.25(土)

※詳細は4ページをご覧ください。

### 平常展

モダニズム文学と関学

—学生たちの文芸雑誌—

2026.8.1(土)▶10.3(日)

関西学院ではこれまで学生たちによって多くの雑誌が編集・発行されてきました。そのなかには『横顔』『想苑』『関西文学』といった文芸雑誌があります。ここで活動した学生には、神戸を代表するモダニズム詩人である竹中郁や、播磨出身の方言詩人である坂本遼がいました。

雑誌の表紙画には岡本唐貴や浅野孟府が携っており、学生たちと前衛画家との繋がりが見てとれる興味深い資料です。本展では、学院創立から大学設立までの学院の歴史とともに、当時発行された雑誌をご紹介します。

## キャンパスライフを展示する —生活史の面白味へ

2026年5月からの企画展は、体育会と学食をテーマにしたものです。大学博物館では、2019年に企画展として「関西学院の130年 1889-2019」を開催し、学院の130年の歴史を振り返りました。その後も、平常展として「ランバス没後100年 学院の誕生・原田の森時代」(2021年)、「学院を築いた4人の院長」(2022年)、「原田の森から上ヶ原へ—学校のお引越—」(2023年)といった形で学院史にかかる展示を続けてきました。そして、2025年には「NOBLE STUBBORNNESS—関西学院大学体育会のあゆみ—」「関学生の胃袋事情—食からたどる学生生活の変遷—」という二つの平常展を実施しまして、これらをベースに発展的に企画展示としたのが、今回の企画展「スポーツの思い出・胃袋の思い出—体育会と食堂が彩る関学のキャンパスライフ—」です。

昨年の平常展から今回の展示までを含めた、この企画展は、大学博物館においてこれまではあまり正面から取り扱ってこなかったキャンパスライフに関する歴史、すなわち学生の生活史にかかるものとして構成されています。「スポーツの思い出」とはもっぱら体育会の、「胃袋の思い出」とは学食にまつわる、学生の生活の歴史です。

日本民俗学の泰斗である柳田國男はかつて、既存の歴史学を批判する文脈において、村に残る記録は、「平常時は録するに値せずとして、独り自分の責任を逃れ立場を疏明すべき凶変にのみ綿密であり、それがため「我邦の農民の歴史」は、「たゞ一揆喧訴と風水虫害等の連続の如くしてしまつて」おり、それは、「遠慮なく言ふならば記録文書主義の罪である」と指摘しています(柳田國男「国史と民俗学」、『柳田國男全集 第14巻』筑摩書房、1998[1944]、98頁)。大学博物館の展示も、学院の歴史を扱う時には、どうしても「記録文書」に拠るものとなりがちです。上記の「関西学院の130年 1889-2019」展などの場合、学院の「正史」を主に辿ろうとしますので、そのような側面がさらに強くなってしまいます。

ところで、今回の展示について東京庵にて雑談をしていたおりに、東京庵に関するかつての資料となるようなものについては、阪神淡路大震災後の片付けの際にずいぶん廃棄してしまったのだ、ということをかかいました。昨年2025年は、阪神淡路大震災から30年の年でありましたが、改めてその影響が様々なところに及んでいることを意識したところです。同時に、例えば「食(胃袋)」といった生活史にかかる資料を残すことの難しさも感じました。そんな事情もあって本展でも、文書として残されている資料が展示構成の中心となっているという、その傾向は変わらないところではあります。それでも、学生のキャンパスライフへの注目は、「記録文書」の外側を少し多めに示すことができるように思います。

例えば1970年代の後半に食堂からの出火によってかつての学生会館が焼失したことや、かつてのメニューの価格表は驚きをもって、例えば総合関関戦応援メニューだという「勝つたれ一麺」はちょっとした面白味をもって、それぞれ受け取ることができつつ、同時に「正史」ではあまり前面化されない歴史であるのではないかと思います。他方、昨年春の『ミュージアムニュース』(18号)において平常展「NOBLE STUBBORNNESS」に関する内容としても言及したように、スポーツや食といった学生の生活にも戦争の影響が(当然ながら)少なからずあることをしっかり知っておくことも大切でしょう。在学生のみなさんにとっては、体育会も学食もともに身近なものでしょうが、しかしまったく知らない遠い過去も知ることで、近くも遠くもあるこの展示をぜひとも楽しんでもらえればと思います。

本年度は、館長および副館長の更新のタイミングでしたが、昨年度から変更なく、山川暁副館長と濱田による体制として、館を運営していくこととなりました。新たな任期の年にのぞみ、これまで以上に学内にも学外にも開かれた博物館を目指していきたいと考えています。

(大学博物館館長 濱田琢司)

# 展覧会報告 I

## 企画展

美術と文芸シリーズ

# 十河巖がつくる文化の庭

—戦後の大阪朝日会館とアートプロデューサー—

日本語で作られたオペラ史上、最大のヒット作である《夕鶴》。その初演を成功に導いた人物が同窓生であることをご存知ですか。

2025.10.20(月)▶12.13(土)

※休館：日曜日(但し11月16日(日)、11月23日(日)は開館)

後援：朝日新聞神戸総局、社会福祉法人朝日新聞厚生文化事業団、公益社団法人大阪フィルハーモニー協会、西宮市

開館日数 50日

入館者数 3,066人

### 美術と文芸シリーズ第3弾

## 戦後の関西に「文化の庭」をつくる

関西学院に美術制作の専門教育機関はありませんが、卒業生のなかには在学中に画家を志し、その道で活躍した人たちがいます。そこで大学博物館では、創立から戦前期までの学院で青春時代をすごした作家たちを見つめる企画展「美術と文芸シリーズ」を開催してきました。第3弾となる本展では、かつて中之島にあった総合文化施設・大阪朝日会館の館長として関西の芸術文化の発展に貢献し、自身も絵や詩などの創作活動をおこなった十河巖(1904-1982、1928年高等商業学部卒)についてご紹介しました。

本展開催のきっかけは、2019年度にご遺族から受贈した資料群に含まれていた1枚の絵はがきでした。1957年に作曲家の團伊玖磨から十河に送られたもので、スイスでのオペラ《夕鶴》公演が大成功したことを「まず生みの親十河さんにお知らせします」と書かれていました。《夕鶴》の初演に至るまでの経緯は本展図録\*に掲載のため本紙では割愛しますが、十河は関西芸術界の振興への貢献、とくに《夕鶴》の企画に尽力したことが評価され、1953年に伊庭歌劇賞を受賞しています。しかし、この功績はあまり広く知られていないかもしれません。絵はがきの展示を通して、文化発展の要としての役割を果たした十河にスポットを当てることを決めました。

團の絵はがきが入っていた小引き出しには、團作曲、十河作詞による《朝日会館のうた》の楽譜も入っていました。制作の目的は不明ですが、歌詞から会館スタッフ用の愛唱歌と思われる。当時、「文化の殿堂」と称された朝日会館において、十河は本楽曲の歌詞で会館を「文化の庭」、

スタッフを「園丁」に例えています。生活に広がり添える「庭」という語の選択には、十河の運営方針への思いがうかがえます。終戦直後の厳しい状況にあった1946年から約6年半、館長を務めた十河は、学生や勤労者の鑑賞機会を支援するなどして芸術の民衆化を目指しました。本展は、この歌詞を展覧会のタイトルにしています。

### 大阪朝日会館と関西学院

## 同窓をつなぐアートプロデューサー

「美術と文芸シリーズ」で十河を探りあげる意義のひとつは、館長時代の十河の仕事に、阪神間で活動していた関学出身の作家たちのつながりが見えることです。十河は今で言うところの「アートプロデューサー」として自身の人脈を活かした多彩な企画を催しました。たとえば、十河と同時期に学院の絵画部弦月会に属していた画家・吉原治良(1928年高等商業学部卒)と詩人・竹中郁(1927年文学部卒)、高等商業部の後輩で作曲家の大澤壽人(1930年卒)、在籍期間は重なっていませんが十河の館長時代に学院で英文学を教えていた寿岳文章(1923年高等学部卒)などが会館の企画に登場します。

なお、十河の依頼で吉原がデザインした朝日会館開館25周年記念の緞帳を、わたしたちはモザイク壁画として西宮上ヶ原キャンパス内で見ることができます。この緞帳は残念ながら現存していませんが、原画をもとにした壁画が学生会館新館2階のラウンジにあります。作品選定から壁画構成までを担当したのは、治良の息子で具体美術協会のメンバーであった吉原通雄(1955年経済学部卒)です。十河と同窓作家、朝日会館をつなぐ作品をぜひご覧ください。

### 開催記念講演会とイベント

## 十河と関西楽壇について知る・聴く

館長時代の十河は関西文化の質向上に資するために、また経営上の判断から関西に芸術団体を作る必要性を感じていました。そこで、指揮者の朝比奈隆が率いる関西交響楽団(現・大阪フィルハーモニー交響楽団)と関西オペラ協会(現・関西歌劇団)の設立を支援し、活動が軌道に乗るよう興行面から支えます。当時の十河と朝比奈の関係性や関西楽壇の状況について、会期中の2025年11月6日(木)に本展図録の監修者である小味渕彦之氏(同志社女子大学准教授、豊中市立文化芸術センター総合館長)にご講演いただきました。また、11月23日(日)には関西学院交響楽団の定例コンサート「ALL KWANSEI ORCHESTRA 秋の中央講堂コンサート」(主催：関西学院交響楽団・関西学院交響楽団OB会、後援：関西学院大学博物館、演奏：ALL KWANSEI ORCHESTRA)にて、大澤壽人作曲の《路地よりの断章》(抜粋)が小味渕氏の解説付きで演奏されました。

▼講演会の様子

▼学生会館新館2階ラウンジにある大阪朝日会館の緞帳デザインをもとにしたモザイク壁画(撮影：藪口雄也)



本展は、2025年音楽クリティック・クラブ賞の特別賞を受賞しました。ご来場いただいた皆さま、また開催に際しご協力を賜りました関係者の皆さまに心より感謝申し上げます。

(\*図録は館内にて税込1,000円で販売中。)



# 展覧会報告 II

平常展

関西学院が育んだ画家たち  
原田の森 1889-1929

特集陳列

新収蔵品 合羽摺の蔵書票

原田の森時代の関西学院で学んだ画家たちに注目した展覧会。  
特集陳列では合羽摺の蔵書票をご紹介します。

2026.2.16(月) ▶ 4.25(土)

9:30 ~ 16:30

※休館:日曜日(ただし3月22日(日)は開館)、祝日、3月23日(日)

開館日数 58日

上段:神原浩《ブランチ・メモリアル・チャペル I 尖塔》  
下段:左から平塚昭夫《加比丹 17》、《加比丹 18》、《加比丹 19》、《加比丹 21》

平常展  
関西学院が  
育んだ画家たち  
原田の森  
1889-1929



特集陳列  
新収蔵品 合羽摺の蔵書票

大学博物館は年に数回、学院の歴史をご紹介します「平常展」という展覧会を開催しています。博物館を訪れてくださる皆さまとともに本学が歩んできた道のりを振り返り、未来を築く礎としたいと考えています。

原田の森が育んだ

## 画家たちの学生時代

関西学院は1889年、原田の森(現・神戸市灘区)に創立されました。ここで学んだ学生には、神原浩や吉原治良など、のちに画家として活動した人物がいます。本展は全2章構成で、創立から学院が移転する1929年までの原田の森時代の歴史とともに、その時代に在籍した画家たちに焦点を当てました。

第1章では学院創立以降の歴史と当時の学生たちの生活がうかがえる資料をご紹介します。神戸という大きな港町にほど近い原田の森キャンパスの周辺にはカフェやバーがありました。このような場所で、学生たちは岡本唐貴や浅野孟府といった前衛画家たちと交流をもちます。原田の森キャンパス周辺の環境については、1924年中学部卒業の小金丸勝次がキャンパスと周辺の店舗を描いた《原田乃森 関學時代・・・思ひ出の地図(大正中期-昭和初)》(1970年頃)からご覧いただきました。

学生たちのその後

## 画家としての成熟

学院出身の画家たちの作品を第2章でご紹介しました。学院から離れた後の彼らの経歴はさまざまです。



▲展示室の様子

学院最初期に普通学部と高等学部で在籍した神原は、高等学部退学後にメキシコに移り、その後ヨーロッパでの遊学を経て帰国します。帰国後は中学部や神戸女学院で図画の教師として働きました。帰国後の神原は原田の森キャンパスの校舎をしばしば作品に残しています。本展で展示した作品は、ブランチ・メモリアル・チャペルや本館の外観をエッチングという版画技法で捉えたものです。建物を囲む木々は軽やかなタッチで描かれ、柔らかな光が表現されています。

現在、国際的に評価されている具体美術協会の設立者である吉原治良は、終生関西で制作を続けた画家です。大阪で生まれた吉原は高等商業学部を卒業。1934年に藤田嗣治の勧めで二科展に出品します。その後、1954年に芦屋市を拠点として具体美術協会を設立し、制作を続けながら後進の育成にも力を入れました。本展では吉原による上ヶ原キャンパスのスケッチと、彼の晩年の作品を展示しました。

学院出身の画家たちの画業をたどると、彼らがそれぞれに個性を開花させていたことがわかります。

日本独自の技法

## 合羽摺の蔵書票

当館は、蔵書票の蒐集家・原野賢吉による原野コレクションを収蔵しています。蔵書票、豆本、小説、その他関連資料からなる本コレクションは総数20,000点を超え、2007年の受贈以来、現在も調査されている資料群です。このコレクションに含まれる蔵書票の制作者に合羽摺の作家・平塚昭夫がいます。2024年に妻・尚子氏より平塚の蔵書票361点を原野コレクションの関連資料として受贈しました。特集陳列ではこの新収蔵品から40点を展示しました。

本展でご紹介した作品は、江戸時代の長崎のオランダ商人を描いた加比丹シリーズと、『鶯娘』『京鹿子娘道成寺』など有名な歌舞伎の演目を表した歌舞伎絵シリーズです。歌舞伎絵シリーズは、着物の模様や役者の表情など細かい描写に平塚の表現力と技術力の高さがうかがえます。平塚の蔵書票の特徴は、この精緻な描写に加え、複数の版を重ねて作り出す色鮮やかな表現にあります。本展では、手のひらの大きさの蔵書票に詰まった魅力をご覧いただきました。



▲特集陳列の様子



## 企画展の予告

### 企画展

# スポーツの思い出・胃袋の思い出

## 体育会と食堂が彩る関学のキャンパスライフ

2026年5月18日(月)～7月25日(土)

※休館：日曜日、祝日、6月19日(金)

後援：関西学院倶楽部

関西学院大学体育会同窓倶楽部(K.G.A.A.)  
西宮市

関西学院大学の歴史を振り返る際、学生生活の変遷は欠かせないテーマです。大学博物館では2025年に、体育会のあゆみと食堂の歴史についての平常展をそれぞれ開催し、多くの方々からご好評をいただきました。本展では、体育会と食堂をキーワードに、創立から現在までのキャンパスライフの変遷をご紹介します。

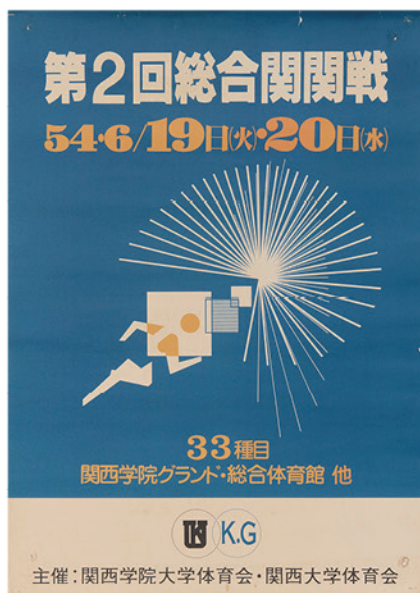
関西学院は1889年、原田の森(現・神戸市灘区王子動物園付近)で創立しました。今日の体育会のモットーである"NOBLE STUBBORNNESS"(ノーブル・スタボネス)や、学生会館新館で営



ステーキランチ (三田屋) 1993年  
『関西学院大学卒業アルバム』

業している東京庵<sup>とうきょうあん</sup>という食堂の原点は、原田の森時代にあります。体育会や食堂は、1929年の上ヶ原への校地移転や大学設置という学院の大きな節目を経て、発展してきました。その様子を学生生活案内の冊子や学生手帳、学生新聞などの資料のほか、卒業アルバムに収められた写真からご覧ください。

あわせて本展では、運動部の記念誌や関西学院大学生活協同組合の冊子などに記載された学生の声もご紹介します。当時の学生生活に想いを馳せる時間になりましたら幸いです。



第2回総合関関戦ポスター 1979年



東京庵 1958年 (『商学部卒業アルバム』)



原田の森の学生食堂 1928年  
『高等商業学部第13回卒業アルバム』

### 【開催記念講演会】

「キャンパス・トラディション  
—関学七不思議を読み解く—」

講師：島村 恭則氏  
(関西学院大学社会学部長)

日時：2026年5月26日(火)  
17:00～18:30

会場：西宮上ヶ原キャンパス  
大学図書館ホール

※事前申込不要、参加無料

※当日は開館時間を9:30～19:00に変更します。



展覧会図録 1,000円(税込)  
出品資料 89点や研究者による論考・コラムを収録。  
参考画像も満載!



チキンバターラーメン (生協食堂) 2001年  
『関西学院大学卒業アルバム』



関西学院大学博物館通信 第20号  
KGU MUSEUM NEWS No.20

2026.4.20

関西学院大学博物館

〒662-8501

西宮市上ヶ原一番町1-155

TEL 0798-54-6054

URL <https://www.kwansei.ac.jp/museum>